

ISSN: 2186-9278

**ソーシャルワークぎふ
第19号**

特 集

<ソーシャルワーカー・デイ in 岐阜>

2013(平成25)年 6月

一般社団法人 岐阜県社会福祉士会

目 次

1. 巻頭言「期待される力量の共通言語化を」	—宮嶋 淳—	・・・ 2
2. 特集「2012.7.16. ソーシャルワーカー・デー in 岐阜」		
1. 記念講演「ソーシャルワーカーの力量を高める原則を学ぶ」	—川村隆彦—	・・・ 3
2. シンポジウム「岐阜県におけるこれからのソーシャルワーク」	—宮嶋淳、成瀬康弘、立木孝幸、内木克治、河瀬幸子—	・・・ 15
3. 原著論文		
1. 介護事業所における介護職員の職務満足・転職・離職に関する探索的研究	—小木曾加奈子、佐藤八千子、今井七重—	・・・ 37
2. 経管栄養に関する胃ろう造設を行う病院職員への意識調査	—退院時の病院から在宅生活への移行における課題— —柘宜佐統美—	・・・ 47
3. ニュージーランドのソーシャルワーク教育からの示唆	—CPIT へのヒアリング調査より— —宮嶋淳—	・・・ 57
4. 実践報告		
1. 「くわのみ」における職員の学習教育活動	—繁澤正彦、鈴木奈緒子—	・・・ 70
2. 学習する地域福祉推進組織体としての社協をめざして	—中津川市社協における実践からの考察— —千葉忠道—	・・・ 77
5. 資料		
1. 岐阜県内の市町村における成年後見制度利用支援事業の現状	—市町村への要望書の提出とアンケート調査— —岡川毅志、田部宏行—	・・・ 91
6. 新入会員の声		・・・ 102
7. 資料		・・・ 103
(1) 定款	(2) 執筆要綱	(3) ISSNとは何か
8. 編集後記	—繁澤正彦—	・・・ 116

原著論文

ニュージーランドのソーシャルワーク教育からの示唆 -Christchurch Polytechnic Institute of Technology へのヒアリング調査より-

Suggestion from Social work education in New Zealand Hearing investigation to CPIT

キーワード: ニュージーランド・ソーシャルワーク教育・ヒアリング調査
New Zealand/ Social work education/ Hearing investigation

宮嶋淳(中部学院大学)

要約

本稿では、ニュージーランドの高等教育の枠組みを確認し、その中でのソーシャルワーク教育の実例について報告する。具体的には、ニュージーランド・クライストチャーチ市でソーシャルワーク教育を展開しているポリテクニクを例にとり、ソーシャルワーク教育の思想・プログラム・評価・質的保証の仕組みを検討する。

この調査の結果、CPITのソーシャルワーク教育は、ソーシャルワークの理論と実践の統合化を重視して展開されている。ソーシャルワーク教育の到達レベルを質的に担保するため、学生の主体的な参加やエージェンシーとの協働を柱としたプログラムが構築されている。そして学生の力量が目標とする卒業要件に到達しているのかを評価するため、国際標準を活用していることが明らかになった。

今回の調査により、CPITが取り入れている方策は、わが国のソーシャルワーク教育の質的向上のため、取り入れられるべき方策であろうとの示唆を得た。

1. はじめに

わが国のソーシャルワーカーである社会福祉士の養成教育は、2007年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正により、新たなカリキュラムに改正された。法改正に際し、衆議院厚生労働委員会(2007.11.2.)は社会的援助を必要とする者の増加に鑑み、より専門的な対応が出来る人材を育成するため、専門社会福祉士の仕組みを早急に検討するよう付帯決議している。日本学術会議社会学委員会福祉職・介護職育成分科会¹⁾は、生活支援者としての福祉職を社会福祉士及び精神保健福祉士とし、社会福祉の援助を必要とする者のニーズに対応するため、同資格の養成教育並びに継続教育を充実させ、実践能力と専門性の向上を求めている。そして2010年10月から2年間、日本社会福祉学会の会長であった白澤²⁾は、社会福祉士に求められる役割とは、①福祉課題を抱えた者の相談及びサービス利用支援、②利用者の自立生活への総合的包括的援助、③地域福祉の推進への働きかけであるとした。さらに日本社会福祉教育学校連盟等³⁾は、主催する全国社会福祉教育セミナーにおいて、実践力を高める教育課程の質的向上を目指すことが、社会福祉系大学等の存在意義を左右するという認識を示して

いる。

このような社会福祉士を取り巻く社会的情勢を踏まえ、社会福祉制度としての社会福祉士養成教育は、社会や利用者が求める実践力のある専門職の養成を担保する必要性に迫られている。なお、「わが国のソーシャルワーカー」とは、日本学術会議第18期社会福祉・社会保障研究連絡委員会⁴⁾によれば「社会福祉士あるいは精神保健福祉士」をさしている。この見解を支持し本稿では、わが国のソーシャルワーカー養成教育という場合、社会福祉士及び精神保健福祉士養成教育と同義とする。

II. 目的

本稿は、わが国のソーシャルワーカー養成教育の質的向上を探求することを目的とする。その一方策として、学士レベルでソーシャルワーカー養成教育を展開するニュージーランドに焦点をあて、ニュージーランドにおけるソーシャルワーク教育の事例を調査した結果を考察する。その考察から、わが国のソーシャルワーカー養成教育の質的向上のための示唆を得ようとするものである。

III. 研究方法

1. 調査の対象

わが国のソーシャルワーカー養成教育は、学士レベルで展開されている。そこで、大学院レベルを参照するのではなく、学士レベルでいかなるソーシャルワーカー養成教育が行われているのかを国際的に調査検討していくことにより、国際比較を行うことが必要である。また、国際ソーシャルワーカー連盟⁵⁾は2014年に新しい重層的なソーシャルワークの定義（「グローバル」「リージョナル」「ローカル」の三段階）を提示しようとしており、わが国とリージョナルな位置・圏域にある国・地域に焦点をあてる。すなわち、国際ソーシャルワーカー連盟のいうアジア・太平洋地域に焦点をあてる。また、わが国がソーシャルワークの先進国として、多くの学びを得てきた国に焦点をあてる。

これらの条件に適合する国として、今回の調査においてはニュージーランド（以下「NZ」と略す。）を、調査の対象とすることとした。なお、ソーシャルワーカー資格制度を有しているリージョナルな位置・圏域にある諸外国として、東アジア諸国が想定でき、中国・韓国を中心に、すでにいくつかの研究蓄積がある（野口⁶⁾、金⁷⁾、大橋⁸⁾）。また、かつて福祉先進国といわれたNZは、今日においても子どもソーシャルワークの領域でわが国に重要な影響を与えている。すなわち、非行少年と家族の関係に介入するファミリーグループ・カンファレンスの技法（林⁹⁾）やスクールソーシャルワークのあり方に影響を与えている修復的対話（山下¹⁰⁾）等は、わが国においてソーシャルワーク実践におけるモデルとして紹介されている。その一方で、NZにおける、それらのソーシャルワーク実践モデルを如何に伝達・継承しているのか、如何にソーシャルワーカーを養成しているのかという視点からのわが国での研究は稀である。例えば、NZのソーシャルワーク教育については、K・R・ダニエルズ¹¹⁾による報告以降、詳細で具体的な研究報告がなされていない。

本調査の対象は、NZ・クライストチャーチ市にある Christchurch Polytechnic

Institute of Technology (以下「CPIT」と略す。)の学士レベルのソーシャルワーカー養成課程とした。

2. 調査の方法

カンタベリー大学ソーシャルワーク学部教授のK・R・ダニエルズ¹²⁾はNZのソーシャルワーク教育の特徴を次のように指摘している。

- ①英米で採用されているモデルやアプローチから強い影響を受けた。
- ②海外からの影響は、1)教育・訓練システムのモデルと構造、2)最初に教員として任命されたスタッフが外国で教育と訓練を受けてきた者である、3)教材・文献、の3つの側面に及ぶ。
- ③現在の問題は、1)二文化主義、2)ソーシャルワークの果たすべき役割の明確化、3)専門職化である。

ダニエルズは、NZのソーシャルワーク教育の現状を、「イギリスの影響を受け、ソーシャルワーク教育より社会福祉制度の整備が先行したので、ソーシャルワークが伸びなかった。」と指摘している。このことは日本でソーシャルワークが定着してこなかった背景とも共通し、いわば「人づくり」が後回しにされてきたことを意味する。約10年が経過した現在、NZのソーシャルワーカー養成教育がいかに進展し、上記の課題を克服し、NZ固有のあり方を確立してきたのか、その一例から日本が何を学ぶべきなのかを検討する。

- ①ソーシャルワーカー養成教育の特徴を、CPITのカリキュラムから分析する。
- ②CPITの教授へのインタビュー結果を分析し、①の運用上の特徴を明らかにする。

IV. 結果

1. CPITのソーシャルワーカー教育プログラム

CPITの『Bachelor of Social work Programme Handbook 2010』¹³⁾(以下、「CPITハンドブック」と略す。)によれば、同校のソーシャルワーク教育プログラムの内容は文末【資料】のように示されている。また、下線と符号(a)～(j)は考察のために筆者が付した。

筆者が本稿「1. 問題の背景」で示した視点からみたCPITハンドブックに認められる特徴は、次の①～⑥のとおりである。①～⑥は、【資料】における符号と一致する。

【項目①：哲学及び目標】より

- 1、わが国の場合、上記したように未だに「社会福祉士養成教育とは何か」が議論されており、学部卒業時における学びの目標が明確化されていない中、ソーシャルワーク教育の国際基準を自校の教育目標に掲げている(下線(a))。
- 2、二文化主義の中で働くための科目が明確に位置づけられている。このことはマイノリティと呼ばれる人々への支援を行うソーシャルワーカーが学ぶべき科目として示唆に富む(下線(b))。
- 3、わが国のソーシャルワーク教育の中で大きな課題とされている「実践と理論の統合」が、CPITにおいても重視されている(下線(c))。
- 4、わが国では一部の科目で紹介されるに留まるソーシャルワーク専門職団体の紹介について、CPITでは学生が専門性と高めていくための目標の中で掲げ、専門職団体

への加入の促進を明示している（下線(d)）。

【項目②：卒業要件】より

5、全体として、如何にソーシャルワーカーとしての専門的力量を高めるのかが、達成課題として明示されている。

【項目③：科目認定】より

6、わが国のソーシャルワーカー養成教育のように「資格取得」が目標とされるのではなく、表2にみられるように、「専門職性の開発」が養成各年次に常にプログラム化されている。わが国のソーシャルワーカー養成教育における実習時間は、180時間・23日であるのに対し、CPITは120日間と5倍程度である（下線(e)）。

【項目④：学生による研究】より

7、わが国ではITのスムーズな活用に留まっている教育が、CPITの場合、情報の検索や検索した結果を批判的に考察する方法が「専門職性の開発」とリンクさせ、位置づけられている点に特色を見出せる（下線(f)）。

【項目⑤：評価】より

8、評価の枠組みは、②卒業要件の「枠組み」とリンクしていると理解できる。「枠組み」評価が繰り返し、学習のプロセスごとで循環しつつ行われる点に特徴を見出せる（下線(g)(h)）。

9、表3は、列に専門的レベル、行に達成課題が項目立てられている。これは「ルーブリック」の方法に近い。この点がソーシャルワーカー養成教育のプロセス評価と関係がある。しかし、資料からのみでは理解できないので、今後の課題である。

【項目⑥：品質保証】より

10、わが国のソーシャルワーカー養成教育における実習を例にあげると、「実習先の評価＝外部評価」と「学校の評価＝内部評価」の適合性は、ほとんど無視されている。それに対してCPITにおいては「専門職性の開発」が明確に認識され、ソーシャルワーカーとしての「品質保証」が明示されている（下線(i)）。

11、内部・外部の評価を客観化するために、最後に再び、国際基準が照合される。これもわが国のソーシャルワーカー養成教育とは異なる大きな特徴である（下線(j)）。

2. CPITの教員へのインタビュー

CPITのソーシャルワークの教授であるグリニス氏にインタビューを行った。インタビューは、2012年3月、同氏の研究室において、1時間程度半構造化面接として実施した。インタビュー結果の活用においては口頭で説明して了解を得ており、倫理的な問題はない。

以下、その要点を示す。筆者の質問を「Q〇. ～」と記し、グリニス氏の回答を「A〇. ～」と記した。

Q1. 哲学の考え方について。

A1. 新しいプログラムにおいて、哲学は、参加・参画(participation)とパートナーシップを取り入れている。基本的なものは、カルチャーと抑圧への対応のためのアプローチである。ここでは、ソーシャルワーカーとして働いていくために、いかに哲学的姿勢を保つべきかを教育している(k)。

Q2. 倫理綱領の教授方法は。

A2. 統合的なプログラムを活用することになるので、すべてのプログラムが関係している。それは、結果としてプロフェッショナルにつながる(1)。 NZの倫理綱領では5つのスタンダードがある。何度も繰り返すことによって、効果(Placement)や表現力(Performance)が向上するだろう。

アカデミックばかりを重視するのではなく、姿勢や価値を身につけ、アプローチに生かしていくことは容易でないので、確認・チェックしていくことが重要である(m)。 学生たちは、クラスでもコミュニティーでも、個々人同士でも、倫理的であるのかを評価する体験をしている。出席のみならず、授業への参加度を、倫理的であるかどうかをチェックする。

Q3. リサーチとスタンダードのつながりは。

A3. 「スカラシップ」という枠組みになる。論文を活用し、理論と実践をつなげていく。最初の年から、データベースを活用して、論文を読む練習をする。

Q4. ここでいう「リサーチ」とは。

A4. 論文検索のこと(n)。 自分のテーマに即した論文を読むだけでなく、批評的な読み方を習う。

Q5. 日本の大学の授業、「演習」に近いと思われる。

A5. スカラシップでは、グループワーク、ディスカッションなどが含まれるので、同じかもしれない。

Q6. スカラシップのためのアドバイスは。

A6. 取り組みを繰り返すことによって、学生は理論的な面から倫理・政策的な面まで、科学的なアプローチを理解していく。理論的な領域だけではなく、統合的な視点から見て行けるように育てていく。

Q7. 日本でも統合が大切だといわれているが、統合がなされたかを、どのように確認するのか。

A7. それは、ビッグ・チャレンジである。プログラムと関係が深いと考える。1年時に学生は、フィールドワークに1週間行き、1週間の間にエージェンシー(福祉現場)と利用者からフィードバックがある(o)。 またコミュニティーにおけるプロジェクトにも参加する。例えば、地震後に崩壊した建物を、有効に基金を活用して、家族を支援するのかを学生たちが検討する。そして、エージェンシーのソーシャルワーカーは、学生たちとともに議論をする(p)。

Q8. 課題は何時間でこなすことになるのか。

A8. 3年間のプログラムのうち、1年目のフィールドワークは60時間。トータルで960時間が基準である(q)。 登録機関から決められている基準よりも大切なことは、現場から何を学んだかである。

Q9. 課題ができたことの判断はどのようにするのか。

A9. 「アセスメント」「リサーチ」などソーシャルワークの理論に基づく(r)。 リサーチは、他の科目とリンクされているので、総合的な授業を進めていく。

Q10. 評価の枠組みについて

A10. レベル5・6・7で積み上げるのは、昨年度までとあまり変わらない。そこにクリテ

イカル・シンキングがソーシャルワーカーには重要(s)であり、統合化のレベル・アップを重視するようにしている。

Q11. プロフェッションとしての倫理が習得できたかどうかを、どのように評価するのか。

A11. 学生たちの実践によって、見極めていく。プロとして実践できるようになるよう、実習プログラムを組み込んでいる。

Q12. 価値や倫理についてどのように教育するのか。

A12. 教員からのレクチャーというよりも、グループごとでの取り組みが大切(t)。お互いに責任感が育つ。最終目的は、プロとして倫理綱領を取り入れたアプローチをしていけることである。

Q13. IFSW のソーシャルワークの定義について

A13. 現在の定義は「的確」と考える。文化や社会正義が理念に加わった。

Q14. NZ の文化や社会正義に対応する定義が必要ではないか。

A14. もちろん重要である。しかし、定義が複数あると、異なる概念を学生へ教育しなければならず、教育としては複雑になる。

Q15. マオリの文化の尊重は、ソーシャルワークの価値「社会正義」とどのような関係になるのか。

A15. NZ は、バイカルチャーの国である。バイカルチャーという、マオリとパケハだけではなく、他の民族や文化にも配慮している(u)。プログラムの一部に、毎日、マオリ語で祈り、歌うことが含まれている。違いを受け入れていくことを習慣化している。構内に集会場があり他学部生も基本的に学んでいる。

上記の Q&A で示した発話記録から、グリニスの教育方針や教育姿勢を抽出していく。

- 1、グリニスは、A1 で「ソーシャルワーカーとして働いていくために、いかに哲学的姿勢を保つべきかを教育している(k)。」と述べ、価値教育の重要性に触れている。
- 2、A2 では「統合的なプログラム」というキータームに代表されるように、専門職性の追求は「理論と実践の統合(l)」であると認識されている。また「姿勢や価値(m)」が強調され、A1 のスタンスが確認できる。
- 3、Q4 で「リサーチ」とは何かを確認したところ、A4 で「論文検索のこと(n)」と応えており、クリティカル・シンキングの教育を「リサーチ」と認識されている。
- 4、A7 で「理論と実践の統合」の確認方法の例として、「エージェンシー(福祉現場)と利用者からフィードバック(o)」があげられている。そして、学生たちとの「議論(p)」を統合の方法として活用している。
- 5、A8 で実習時間が「トータルで 960 時間が基準であること(q)」、及び柔軟な対応が出来ることを確認している。
- 6、A9 では、課題の達成の判断方法を「ソーシャルワークの理論に基づいて行う(r)」としている。
- 7、A10 で学生の評価の方法としての「クリティカル・シンキング」に触れ、それが「ソーシャルワーカーに重要(s)」であることが強調されている。

8、A12 では、インタビュー中一貫してグリニスが必要だと主張されてきた、ソーシャルワーカーの姿勢としての価値や倫理の教育は、「学生間のグループごとでの取り組みが大切(t)」であると指摘されている。

9、A15 では NZ の二文化主義に留まらない、「他の民族や文化にも配慮(u)」して、ソーシャルワーカー養成教育プログラムが展開されていることが了解できる。

V. 考察

考察にあたっては、わが国のソーシャルワーカー養成教育における川村¹⁴⁾の「価値を基盤としたソーシャルワーク教育」の提唱や宮嶋¹⁵⁾の積上型・価値基盤型・統合型教授法の視点やダニエルズの3つの指摘を視座とした。本稿の考察においては、上記で結果の解釈を行った(a)~(u)を中心に行う。

CPIT ハンドブックによれば、ソーシャルワーカーの教育理念(a)にみとめられるように、ソーシャルワークの国際的な価値基盤を尊重し、それを補強する理念としてマオリとパケハの文化などの多様性を尊重する教育がなされている((b)&(k)&(u)参照)。(b)は、NZのすべての高等教育機関でマオリ文化に対する理解教育が義務化されていることの反映であると考えられる(NZ百科事典¹⁶⁾)。

学士レベルのソーシャルワーカーの位置づけも「学生と専門職との『橋渡し』(c)」であると明示され、CPITのプログラムが専門職の養成教育の枠組みであることが明示されている。わが国において社会福祉士養成教育が専門職養成教育であるか否かが、「はじめに」で触れたように、未だに議論されていることを思うと、すこぶる明確な位置づけがなされており参考になる。そして、(d)&(l)にみられるように専門職養成と専門職能団体への入会とが明確に結びついていることもわが国との顕著な相違点である。

ソーシャルワーク実践力を担保する有効な手段とされている実習は、(e)及び(q)のように120日間(960時間)とわが国の5倍になっている。そして、(o)&(p)に認められるように実習先のワーカーと学生との関わりが重視されている。わが国においても社会福祉士養成機関と実習先との連携の重要性が叫ばれているが、その内実は質を担保しているとは言い難いものである。

(f)&(n)に認められるように、情報の処理・収集・分析能力は、専門職の能力開発に欠かせないと認識されている。この点は、わが国の専門職能団体である日本社会福祉士の生涯研修を例にあげれば、社会福祉士の共通基盤の1つである「実践研究」に通じるものがある(日本社会福祉士会¹⁷⁾)。つまり、わが国もNZも、ソーシャルワーカーの実践の質を向上させるために、最新の情報を収集・分析し、自らの専門的力に定着させていくための手法として、事例研究と記録の活用が重視されているのである。

わが国におけるソーシャルワーカー養成教育の焦点の1つには、「評価」の問題がある(日本社会福祉教育学会¹⁸⁾)。CPITハンドブックでは、(g)で「プロセス評価」について明示され、(h)と表3で「達成課題」、そして(i)で評価の有効性を「内部(=学内)評価」と「外部(=学外)評価」で担保し、最終的にグローバル基準で審査する(j)と明確にされている。これらの評価の運用の仕方として教員が「ソーシャルワーク理

論の活用(r)」を教授し、学生自身が「クリティカル・シンキング(s)」並びに「グループ活動((m)&(t))」を行うことにより達成させていることが明らかとなった。すなわち、CPITのソーシャルワーク教育は、教員と学生、並びに学生間の相互作用により深められている。さらに上記したようにエージェンシー(福祉実践の現場)と学生との間の相互作用を用いて、実践の理論化をチェックし、学生の実践力の向上を測定しているのである。この点がわが国のソーシャルワーク教育で最も欠けている点ではなからうか。CPITが行っているようなソーシャルワークを学ぶ学生を評価するしくみがわが国で構築されてこなかった現実がある。この現実には、ソーシャルワークを実践的理論的に修得した学生に、実践的な場面でスーパービジョンを十分に行える教員が不足していることと関連している。

以上のように、CPITのソーシャルワーク教育は、ダニエルズが2000年に指摘した、NZのソーシャルワーク教育の問題である、①バイカルチャリズム(二文化主義)、②ソーシャルワークの果たすべき役割の明確化、③専門職化に一定の回答を提示しているといえるのではないだろうか。

まとめると、この調査の結果、CPITのソーシャルワーク教育は、二文化主義に留まらない多文化を尊重しようとしている。ソーシャルワークの価値(Aotearoa new Zealand Association of social Workers¹⁹⁾)や理論と実践の統合化が重視され、学生の主体的な参加やエージェンシーとの協働を柱としたプログラムが構築されている。最終的には、国際標準に準拠して、ソーシャルワーク学生を評価している。

これは、わが国のソーシャルワーク教育の進むべき方向に示唆を与えるものであると考える。すなわち、わが国のソーシャルワーク教育が発展していくためには、第一にソーシャルワークを学ぶ学生と実習を受け入れる現場並びに実習指導者、高等教育機関並びに教員とが協働性を高める必要がある。その中で、理論的に説明の出来る実践力を学生が身につけられるよう、養成するシステムを構築していかなければならない。そのためには実践的にも理論的にも専門性の高いスーパービジョンを展開できる指導者の養成が欠かせない。第二に国際ソーシャルワーカー連盟等が2004年に提示している「ソーシャルワークの教育及び養成のためのグローバル基準」や大学等のソーシャルワーカー養成機関が、機関ごとの明確な評価基準と枠組みを用意し、社会や利用者あるいは後継者に対する説明を果たしていくことが必要なのではないだろうか。

VI. おわりに

本稿は、NZの高等教育とソーシャルワーカー養成教育の枠組みを紹介し、CPITハンドブックとインタビュー調査の結果を一つの事例として考察したに過ぎないという研究上の限界がある。

今後、CPITのソーシャルワーク教育プログラムが、実際にソーシャルワークの質を担保するものとなっているのかを確認していく必要がある。CPITでソーシャルワークを学んだソーシャルワーカーが、如何なるソーシャルワーク実践を現場において展開し、その結果、サービスユーザーから如何なる評価を得ているのかを調査する必要がある。それによって、CPITの教育システムの有効性を明らかにしていく必要がある。こうしたケーススタディを通して、わが国のソーシャルワーク教育がNZのソーシャル

ワーク教育から学ぶべき諸点を抽出し、理論化を行うことの意義は大きいと考える。

Abstract

This paper will report on the framework of higher education of social work in NZ. Specifically, using the example of CPIT, developers of social work education in NZ, I examine the structure of theory, programs, assessment and quality assurance of social work education.

The conclusion of the study is that CPIT's social work education is developed with an emphasis on integrating the theory and practice of social work. To qualitatively ensure the attained level of social work education, the program is built on the pillars of proactive student participation and cooperation with agencies. Also, it became apparent that international standards are applied in order to evaluate whether the students' abilities have reached the targeted requirements for graduation.

These results would suggest that the policies adopted by CPIT should also be adopted in order to improve the quality of social work education in Japan.

文 献

- 1) 日本学術会議社会学委員会福祉職・介護職育成分科会：「提言 福祉職・介護職の専門性の向上と社会的待遇の改善に向けて」、2011
- 2) 白澤政和：「ソーシャルワークの現状と危機」社団法人日本社会福祉士会『2010 年度スクールソーシャルワーク研修』、23-63、2010
- 3) 社団法人日本社会福祉教育学校連盟：『2012 年度全国社会福祉教育セミナー』6、2012
- 4) 日本学術会議第 18 期社会福祉・社会保障研究連絡委員会：『ソーシャルワークが展開できる社会システム作りへの提案』、2003
- 5) International Federation of Social Workers: *General meetings*, 2012
- 6) 野口定久：「日中韓社会福祉国際シンポジウム 2007 年」『平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）地域福祉計画・介護システム開発を通じた東アジア型福祉社会モデルの構築に関する研究』、2007
- 7) 金文華：「中国におけるソーシャルワーク教育の現状と課題」『地域総研紀要』7(1)、1-4、2009
- 8) 大橋謙策：「アジア型ソーシャルワーク教育研究の課題と枠組み」『平成 21～23 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）平成 21 年度報告書 アジア型ソーシャルワーク教育の標準化と国家試験の互換性に関する研究』、2010
- 9) 林浩康・鈴木浩之編著：『ファミリーグループ・カンファレンス入門』、明石書店、2011
- 10) 山下英三郎：『修復的アプローチとソーシャルワーク』、明石書店、2012
- 11) K・R・ダニエルズ／大友信勝訳：「ニュージーランドにおけるソーシャルワーク教育と訓練」『白山社会学研究』8、76-92、2000
- 12) 前出 11)
- 13) Christchurch Polytechnic Institute of Technology: *"Bachelor of Social work Programme Handbook 2010"*、2010

- 14)川村隆彦：『価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習』、中央法規、2002
 15)宮嶋淳：「実習・演習」川廷宗之編『社会福祉士養成教育方法論』、弘文堂、205-11、2008
 16)ニュージーランド学会：『ニュージーランド百科事典』、春風社、2007
 17)社団法人日本社会福祉士会：『新社会福祉援助の共通基盤 第2版下』、中央法規、2009
 18)日本社会福祉教育学会：『日本社会福祉教育学会誌』、6、2012
 19)Aotearoa new Zealand Association of social Workers：“Code of ethics”、2008

【資料】

Christchurch Polytechnic Institute of Technology
 『Bachelor of Social work Programme Handbook 2010』（抜粋）

① 哲学及び目標

1) 理念

ソーシャルワーク学士(BSW)の理念は、CPIT 共通課程に組み入れられた幅広い価値と一致し、教育理念は表3のとおりである。最も重要な価値は、ソーシャルワークの価値(ANZASW、2008年; SWRB、2008年; IASSW&IFSW、2000年)(a)を補強し、人びとの権利に対する基本と核心およびソーシャル・ワーク・サービスの利用の保護及びそれらの保持に関する価値及び確信と一致していることである。

次の領域に関する専門的知識及び技術を CPIT におけるソーシャルワークとして学ぶ。

- ・ ソーシャルワーク理論 ・ ソーシャルワークにおける個人の実践と専門的統合 ・ 多様性の尊重、特にマオリの利益のための特別な考察と違いを備えた中で働くこと(b) ・ 導入レベル研究
- ・ フィールドワーク ・ 社会学 ・ 心理学と精神機能障害 ・ 人間の開発及び幸福
- ・ コミュニケーションの技術 ・ 福祉の法則及び構成 ・ 政治的な政策理論、経済政策理論および社会政策理論
- ・ ソーシャルワーク実践の技術に含まれるメンタル・ヘルス評価

これらの領域に関する統合を行うことにより、BSW プログラムは、ソーシャルワークを学ぶ学生が理論と実践の重大な「橋渡し」を構築することができる理論的考察レベルを構築する(c)。BSWの集成的な性質は、これに基づく基礎である。これは、学生が専門家として理論を備えた実践を行うことを保証する。これは、コースにおける学習成果として評価に反映される。

専門性の伝達は、学生が独立した実践者へと成長する過程での、各レベルを想定し、透明で協力的な姿勢を保証する。これはより広く卒業後のソーシャル・ワーク・コミュニティへの入会を促進(d)し、それらが自分の持続的な専門の開発に寄与することを可能にするだろう。

2) プログラムがめざすところ

こうした BSW の理念によって導かれているプログラムは、理論・思考・実践及びアオテアロア・ニュージーランドの統合ソーシャルワーク実践およびグローバルな状況に即して開発することを目指す。プログラムは、ソーシャルワークが機能するグローバル環境及び倫理的なソーシャルワーク実践に影響を及ぼす。それは社会的政治的文化的経済的に複雑な認識である。プログラムは、アオテアロア・ニュージーランドでソーシャルワーク登録者用の教育の必要条件を満たすことを目標としている。

表1 CPIT の教育理念

学 習	個人の達成および成功を増強する肯定的な経験の提供
優越性	高い質と標準を求めること

完 全	開放、公平および正直によって最良の実践に注目すること
尊 敬	個人およびそれらの多様性を評価し、敏感に働くこと
アクセス	学習を保証するために障壁を取り除き、アクセスを自由にすること
マオリ	ワイタンギの条約の尊敬によるマオリ語との関係とコミットメント
反応性	柔軟で率先したこと
創造性	問題解決と革新の増強
協 力	相談と関係の形成は、賭け金保管人との関係を開示
維持能力	ステークホルダーのニーズ：ソーシャルワーク学士課程のプログラムは、連続的な開発および配達の保証、ソーシャル・ワーカーの登録に関する必要条件であり、CPITの専門の標準に伴う。

② 卒業要件 (割愛)

③ 科目認定

BSWは、360の科目のうち、レベル5に指定されたコースの完成を要求する。それは3年間にわたるフルタイムの学びと同等なプログラム。ソーシャルワークの1単位は、16.6時間の学習による。1年当たり120単位まで取得することができる。学年は、2学期制である。コースはすべて、各々のレベル5・6・7に120単位が必須である(表4)。

CPITの実習は、少なくとも異なる2つの領域で120日間行なわれる(e)。

表2 年次プログラム

1年次：レベル5の120単位	2年次：レベル5～6の120単位	3年次：レベル5～7の120単位
SWのための社会学・心理学 専門職性の開発1 人間開 発 人間関係のコミュニケ ーション NZにおける二 文化理解・福祉制度 政策 的構造と過程	SWと法律 SW理論と実践1 調査研究理論 専門職性の開 発2 SW理論と実践の統合1 実習1	NZの社会政策 SW理論と実 践2 専門職性の開発3 SW調査研究 SW理論と実践 の統合2 実習2

④ 学生による研究

情報研究は、分析および結論の根拠を組織し、すべてのコースの中で試みられるために要求される(f)。

⑤ 評価

1) プロセス評価

評価プロセスは、プログラムによって学生の進行をガイドするために使用され、それらが技術・知識および価値の、その必要なレベルに到達したことを保証する。

a) 形成的評価 (Formative assessment)

枠組みが形成されたかどうかの評価は、各コース、進行中のプロセスとして評価される(g)。

b) 付加価値評価 (Summative assessment)

2) 評価の方法

評価の方法は、3年間のプログラムを横断的に使用される。評価は、学生が学習する結果の達成

を実証する(h)ことを目指している(表5)。

⑥ 品質保証

1) 適合

内部評価と外部評価の適合は、評価の有効な標準であり、信頼性・一貫性はプログラムの全体にわたって重要で、それが維持されていることを保証するために必要である(i)。

2) 評価

CPITの標準プログラム評価は、グローバルな調査が終了した時点で、学術的な品質保証部門によって検討され照合される(j)。

表3 BSW: Expectation for Marking Assessments across Levels 5, 6 and 7

評価枠組	Level 5	Level 6	Level 7
発表と表現の明確さ	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションは、能力が論理的なやり方で資料を組織し提示する。 ・適切な学術的なフォーマットの使用。 ・学術的専門用語の使用を発展させる。 ・文法、スペリング、文構築およびレファレンスで必要な事項を発展させる技術的な正確さを学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明白な学術的な技術の開発途上のレベルで注意深く組織されたプレゼンテーションの実施。 ・明瞭で首尾一貫した考え方の表現。 ・学術的な必要事項に関する専門的で一貫した表現。 ・技術的な正確さは、正確な文法、スペリング、文構築および参照を付けることを備えた受理可能な標準。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容のコミュニケーションでのロジックの高い学位を備えた優れた学術的なプレゼンテーション。 ・議論の論理的な開発。 ・正確な文法、スペリング、文構築および参照を付けることによって証拠づけられた技術的な正確さ。
課題のプロセスの言語化			
明確な目的	<ul style="list-style-type: none"> ・トピックの明確な位置づけ。 ・課題の目的を明らかにすることは、記述の中心的課題となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トピックスは調査された様々な様相を備えた深さに位置づけられる。 ・思慮深く考え、目的を包括的分析的に位置づける。 	
課題に対する的確さ	<ul style="list-style-type: none"> ・課題提出が、指定された時間枠内、そして規定された形式で行なわれる。 		
参照	<ul style="list-style-type: none"> ・APAシステムに準拠した参照を付ける。 精度の高い、テキストの引用。 		
文献資料の使い方	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な文献の熟知。 ・適切な出典の調査と発見。 ・課題に関連づける試み。考え方とテーマに即した理解と証拠。 ・文献から取り出された公式の考え方、あるイワ発見した課題 	<ul style="list-style-type: none"> ・一連の適切な文献を研究した明らかな証拠。 ・文献から明白に獲得された、考えとテーマの課題。 ・考察の公式化、識別し表示されるテキストおよび他のいくつかの出典の使用。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トピックの徹底的な研究。 ・徹底的な批判的分析、議論した広範囲の出典、それらの利用。 ・これは、批判的に文献を分析および理論を査定するための能力によって、プロセスでの独立した思考の開発によっ

	・使用したテキストの表示。	・課題の内容および結論との結びつき。	て証拠づけられる。
理論の使い方	・適切な理論の選択。 ・課題に関する議論に適用するための理論とその理論を適用するための試みの検証。 ・一般的な理論が議論に含まれているか。	・一連のキー理論を活用した表現。つまり、適切で議論の最前線にあること。 ・課題は、理論的な土台およびこれらの考えを統合するための能力についての理解を実証すること。	・重要で適切な分野の内容/理論の洞察力があり、適切な選択がなされる。 ・複雑なことの選択及び取り扱いの両方で統合ができること。熟練および革新的な理論を構築できること。 ・一貫して重大な分析の要請を実証すること。
理論の批判的分析	・理論の調査及びトピックとその関連を実証。 ・課題の、一般的な概念を適用するための試み。	・分析による理論の明瞭さおよびトピック・エリアへ適切な考えの重要な様相の議論。	・一貫して重大な分析・実証。 ・テキスト上の統合、上手く明白に支援されている。
結論	・結論は発見物を調査し、理論と文献に根ざしている。 ・明白に評価できる技術。	・研究から抽出した完全に高度に発展した結論は、議論の要約の中で示される。 ・発見は、理論と文献に基づくバランスのとれた結論を提供しているか。 ・明白な評価技術。	・理論と文献によく根ざしていた分析的で明瞭な結論。 ・考案した、評価できる技術および独立したことの開発を示すこと。
概念化	・論理的で首尾一貫したスタイルによる理解の実証。	・一貫性ある認識。認識に基づく仮説の構築の技術。情報間の矛盾を一致させる能力。	
問題の解決	・具体的な方法で問題を分析し、問題解決活動にいくつかの理論を適用し、矛盾を認識する。 ・問題解決へのアプローチの提示。	・批判的で複雑な問題の多くを分析し情報の矛盾を解決する。 ・問題解決活動へのプロセスを、中心的に活用できるアプローチで行なう。	
実践に関する理論の適切な反映	・理論と実践のリンクを考慮する場合、明白にプロセスが反映させられる。 ・理論的な考えがどのように実践の決定に影響を及ぼすかについて、資料を引用し反映させることができる。	・熟慮した適切な目的と明瞭な反射を示す証拠。 ・個人・社会・専門的な実践への理論上の焦点と議論を提供する。	・知見の開発。実践のセッティングと重大な思考および個人の反射を十分に活用する。 ・理論と実践の統合の問題を評価する。 ・洞察力を持って個人と社会の文化的専門的に展望し、実践へ理論を適用する。